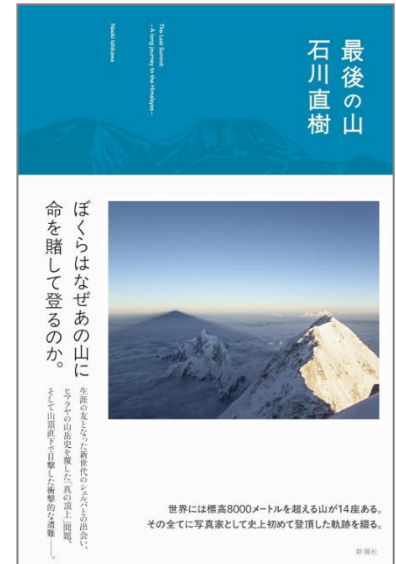


最後の山（石川直樹 著）

著者は写真家。高校2年生の1994年インド・ネパールを一人旅した後、世界中を旅するようになる。22歳で北極点から南極点までを人力で踏破。23歳で七大陸の最高峰の登頂に成功した。2022年に8000m峰14座をめざそうと決意する。ここから一気に10座を登頂する。8000m峰14座登頂の記録だ。



2001年5月23日 エベレスト 8848m登頂
2013年5月17日 ローツエ 8516m登頂
2014年5月25日 マカルー 8463m登頂
2019年7月25日 ガッシャーブルムⅡ 8035m 登頂
2022年4月9日 ダウラギリ登頂 8167m登頂
5月7日 カンチェンジェンガ 8586m登頂
7月22日 K2 8611m登頂
7月27日 ブロードピーク 8051m登頂
9月28日 マナスル(真の頂上) 8163m登頂
2023年4月15日 アンナプルナ 8091m登頂
7月2日 ナンガパルパッド 8126m登頂
7月26日 ガッシャーブルムⅠ 8080m 登頂
10月2日 チョ・オーユー 8188m登頂
2024年10月4日 シシャパンマ 8027m登頂

この中で最も凄まじい登攀は14座目のシシャパンマだ。第八章を紹介する。2023年10月2日にチョ・オーユーに登頂し、一泊した後 シシャパンマABCに向かっている。石川はイマジンネパール隊のメンバーとして参加している。彼の14座目であるシシャパンマだが、この山に登攀しようとしているのは他に二人いた。

一人はジーナ・マリー・ルズシドロ。45歳。彼女はNYのマンハッタンに暮らすポーランド系アメリカ人だ。彼女は2018年5月にエベレストに登頂し、2019年に七大陸最高峰の登頂に成功。2021年にはアンナプルナに登頂した史上二人目のアメリカ人女性となった。彼はダウラギリ遠征のときに彼女と知り合い、BCで顔を合わせれば話もするシンパシーを感じる部分があったそうだ。

もう一人がアンナ・グトゥ。33歳。ウクライナ出身。ヒマラヤに向かうことになったのはプルジャの14座登頂のドキュメンタリーを見たのがきっかけだ。そこで、プルジャの登山会社であるエリートエクスペディションに連絡しヒマラヤに登り始めた。彼とはナンガパルパッドで知り合った。二人ともヒマラヤでしか会わないけれど、大切な友達だ。

ジーナとアンナは「アメリカ人女性初の全14座登頂」というタイトルをかけて今、争っている。そんな二人が露骨に争っているのを見て石川は悲しくなる。

彼はどちらか一方の味方になるつもりはなかった。

彼はイマジンネパール隊のメンバーに参加していたのでプルジャ率いるエリートエクスペディション隊と行動を共にしていた。なので、別隊のジーナと話す機会は殆どなく、アンナとは毎日一緒だった。

ジーナの隊はシシャパンマ BC に向かったとの情報が入る。アンナと石川達はシシャパンマ BC に到着するがジーナの隊は既に出発した後だった。

アンナ達は翌日、ジーナ隊を追いかける。シシャパンマはサンスクリット語で「ゴサインタン」という別名を持っている。「神の座」という意味だそうだ。

彼のイマジンネパール隊は翌日出発することに決定。アンナのエリートエクスペディション隊は夜のうちに出発していた。

10月6日5時にABCを出発するとアンナ達の隊の姿は見えない。C1 6300mに泊まり、一気に頂上をめざすことにする。6800mのC2に到着する。アンナ隊はここで休んでいた。ジーナ隊も近くでテントを張っていた。

アンナもプルジャも、ジーナ隊を出し抜こうと考え気合いを入れて登っていく。テンジン・ラマに率いられたジーナ隊にあっという間に追い抜かされる。彼の隊はジーナとアンナに次ぐ三番目の位置にいた。

アンナたちは中央峰から主峰に向かう。テンジンとジーナたちは左にトラバースし主峰ダイレクトに向かうルートを取った。後ろから追う形となった石川はジーナ達が選んだルートが正しいだろうと左に道を取った。

少し休憩を取っていった時、無線機から「雪崩だ。アンナたちが流された」と連絡が入った。石川たちは「引き返す」ことに決めた。そして山頂まで僅かな所にいるテンジンとジーナたちの写真を撮った。あと数十分でジーナたちに軍配が上がったとその時は思った。しかし頂上直下のピンポイントでも雪崩が起きた。二人とも雪崩で流された。二度の小さな雪崩が狙ったかのように頂上間近の2隊を押し流した。衝撃的な遭難を目にして人間の意志を超越した何か大きな力が二人を登らせなかったのだ。彼には山が怒ったのだとしか思えなかった。

翌年の2024年9月29日。石川はプジャ（お祈り）を行い、10月4日シシャパンマに登頂。ついに14座に登頂した。登頂後、彼はエベレストで亡くなった友人のシェルパの家族を訪れ、追悼の想いを家族に伝える。ヒマラヤの高峰を登るのには多くのシェルパの力が必要だ。彼はその重さを感じ、シェルパへの感謝の思いを常に持っているのが良い。文章もこなれているが写真家としての矜持が素晴らしい。

最後の山 石川直樹著 2025年8月25日発行 新潮社 2200円（フカ）